



21世紀を読む

人材求め 競い合う アジア



中嶋 嶺雄

なかじま・みねお 国際社会学者。UMAP国際事務総長。北九州市立大大学院教授。1936年生まれ。著書に『北京烈烈』『日中友好』という幻想』など。

「留学生は未来からの大使」といった響きのいい言葉で留学生を受け入れることができた時代はもう終わったのだろうか。わが国が「留学生受け入れ10万人計画」を打ち出したのは今から二十年前の一九八三年のことであったが、この数値目標は本年すでに達成され、大学や大学院が受け入れる「留学生」に加えて日本語学校や専修学校などに通う「就学生」を含めれば、わが国はすでに約十五万人の留学生を擁している。

ところが、この一、二年の留学生の急増は、主として中国からの留学生の増加によるものであり、しかも入国条件の緩和や実際には修学目的以外の一種の出稼ぎとして来日する留学生の増加に起因している。このため、日本の大学や大学院が世界から優秀な学生を引き寄せるだけの国際競争力を備えただけでは決してないところに、大きな問題が存在する。留学生のなかには犯罪に走る者も出てきていて、日中関係の上でもはや放置できないほどの課題になりつつあるといえる。

留学生10万人時代

一方、国際的な「留学生市場」を眺めてみると、アメリカやオーストラリアはもとよりアジア諸国においても、いかに優秀な留学生を確保するかで各国が激しく競いあっている。わが国の一部の大学のように、入学定員を確保するために中国に出かけていって安易に留学生を集めるといった状況とは大きく異なっている。

このところ私には、国際的な留学生交流の関連での国際会議

出席が相次いだ。十月中旬には私が国際事務総長を務めるUMAP（アジア太平洋大学交流機構）の国際理事会が議長国であるマレーシアのコタキナバルで開かれた。私が到着した日には、マレーシア・サバ大学主催のe-learning（インターネットによる遠隔授業）に関する国際シンポジウムが行われており、



茨城県つくば市で開かれた「ASEM教育交流シンポジウム」

欧米やアジアの参加者が留学生政策も関連させて熱心に英語で討議していた。理事会のうちにサバ大学も訪れたのだが、規模の大きさと南洋風の立派なキャンパスには驚くばかりであった。

十一月初旬にはASEM（アジア欧州会議）の教育ハブがシンガポールで開かれ、私は大学間の国際的な単位互換制度と日本の高等教育の実情について報告した。シンガポール大学のキャンパスには、小泉首相も提唱者の一人であるアジア・欧州間的高等教育交流に備えたアジア欧

州財団の会館が落成したばかりだった。開会の挨拶に立った教育大臣のウン・エン・ヘン氏が高等教育を未来に向けての有望な「産業（インダストリー）」だと強調していたのが印象深い。食卓が隣り合ったASEMのD・コロメ大使は、高等教育に欠かせない外国語として英語と幅広い教養教育がこれからは重要だと言われ、大いに意気投合した。

それから二週間後の十一月中旬には、日本のつくば国際会議場で「ASEM教育交流シンポジウム」が外務省と文部科学省の主催で開かれた。私は総括議長を務めたのだが、そこでもシンガポール代表のザイナル・マンタハASEM人物交流部長らの積極的発言が目立ち、アジアとヨーロッパをつなぐ留学生交流のデータ・ベースを構築したいと熱心に呼びかけていた。UMAPもデータ・ベースをつくらうとしているので、両者が結ばれば世界がつながることとなる。

こうしてみると、日本がこの十年ほど落ち込んで元気を失っているあいだに、アジア諸国は人材養成こそ重要であり、高等教育を二十一世紀の基幹産業だと位置づけて頑張っている姿がうかがえる。わが国でも中央教育審議会が十月初旬に「新たな留学生政策の展開について」と題する中間報告を公表し、留学生の質の向上や受け入れ中心から派遣も重視する方向への転換を打ち出した。留学生への支援体制の強化も含めて、留学生政策の抜本的な見直しが進められている。

